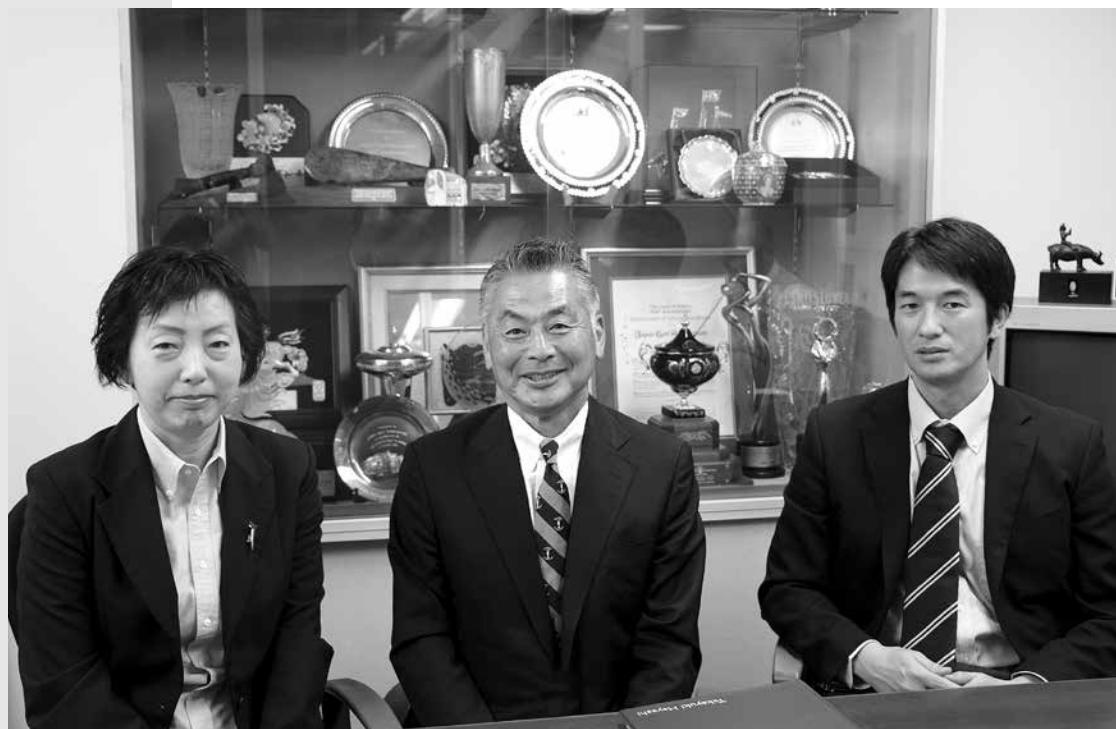


国内競技のレベルアップに向けて レフェリー制度の必要性と育成への取り組み

3オープン改革の一環としてJGAはレフェリー制度を昨年から導入している。レフェリー制度とは何か、なぜ必要なのか。JGAの林孝之規則委員長、大場ゆう子日本女子オープンチーフレフェリー、市村元オープン競技チーフールズディレクターがレフェリー制度について語った。



レフェリー制度について語るJGA大場ゆう子日本女子オープンチーフレフェリー(左)、林孝之規則委員長(中)、市村元オープン競技チーフールズディレクター(右)。

— レフェリー制度とはどのようなものなのでしょうか？

林 まず日本におけるレフェリーの現状からお話ししましょう。日本のトーナメントでは競技委員と呼ばれる方々が運営などさまざまな仕事をしており、その中からレフェリーを出すことが一般的です。日本オープン为例に挙げれば、各地区連盟から推薦していただいた競技委員のみなさんからレフェリーが選ばれていました。ただ、野球やサッカーのようにレフェリーのライセンスが存在するわけではありませんので、規則の知識や運用にばらつきがあったのが実情でした。このままではいけないと、専門的な知識とレフェリー技術を持った人材を登用していこうということになったのです。

市村 具体的にはR&Aのルールテストで一定の基準をクリアした方からレフェリーを採用するというものです。昨年の3オープンとアジアパシフィックオープンダイヤモンドカップのJGA主催4大会で実施しました。

— 日本オープンなどでレフェリーをするにはテストを受けなければならないということですね。

林 そうです。

— 海外でも同様のシステムなのでしょうか。

林 R&AもUSGAもそれぞれ独自のテストで一定以上の点数を取った方の中からレフェリーを選定しています。

市村 アジアの各国でもR&Aルールスクールのテストをレフェリーの採用基準としているところが多くなってきています。



2014年日本オープン大会期間中にコースを入念にチェックする市村元オープン競技チーフールズディレクター、林孝之規則委員長。

— 大場さんは5年前から全米女子オープンでレフェリーを務めていますが、現場はどのような状況なのでしょうか。

大場 全米女子オープンのレフェリーを目指している方が非常に多く、みなさん自費で講習やテストを受けています。最初は地区の競技などを経験してレフェリーとしての技術や知識を高めて全米女子オープンや全米オープンのレフェリーを務められるレベルにまで自分を上げていくという形が一般的です。ただ、全米女子オープンのレフェリーに必要な点数を取ったとしてもそれは永久的なものではありません。規則は4年に一度変更されますから、その度にテストを受け、点数が下がってしまえばレフェリーはできなくなってしまいます。実際に全米女子オープンの現場で前年までレフェリーをしていた方が翌年はレフェリーができずに違う仕事をしているという現実を目の当たりにしています。ですから常日ごろからスキルアップに励み、レベルを維持する、あるいはよりレベルを上げていく必要があるのです。

市村 日本では競技運営全般を担当するという意味で競技委員という名称を使用してきました。競技委員はすべての方が規則上のレフェリーの職務を行うわけではありませんので、競技委員を採用する際にレフェリーとしての能力が必ずしも問われるわけではない場合が多いようです。しかし、レフェリーは最終的にプレーヤーに裁定をする権限を持っていることから、レフェ



マレーシアで行われたルールスクールプログラムレベル3のロールプレーの様子。

リーと運営委員を区別し、レフェリーの採用についてはテストによる規則の知識、そして現場での経験を評価する必要があります。R&AとUSGAはそのためにテストや教育プログラムを実施しており、レフェリーとしてコースに立ちたい方は高い基準をクリアしようとして勉強をしています。

大場 現場で感じるのはレフェリーのみなさんの規則に関する知識が非常に高いということ。しかも年々そのレベルが上がっていると感じます。

林 私は全英オープンでレフェリーをさせていただいていますが、同様に知識の高さと層の厚さを感じます。

— 国内でのレフェリー育成のための取り組み教えてください。

林 R&Aが2013年にリリースした規則教育プログラムにのったルールスクールを全国各地で開催しています。このプログラムは3段階に分かれており、レベル1は基本的な規則知識の習得、レベル2はレフェリーとして紛議を解決する程度の知識の習得、レベル3がトーナメント運営者とそのレフェリーを対象としたスクールとなっています。このうち、レベル1、2に関してはR&Aが作成したプレゼンテーション、プログラム、テストを使用してJGAが国内で開催しているのです。

市村 レベル3のみR&Aが直接運営する形になっています。



① ルールスクールの講師はどのような方が務めているのですか？

林 テストで一定以上の得点を獲得し、このプログラムのための訓練を受けた者が講師を務めます。たとえば、レベル2の講師をするにはレベル3で80%以上の得点を取っていることが必要です。現在、男女合わせて約10名が講師を務めています。

ルールスクールは受講者のみなさんに非常に好評だという手ごたえがあります。また受講したい、あるいはほかの人にも受講してもらいたいという声を数多くいただいています。

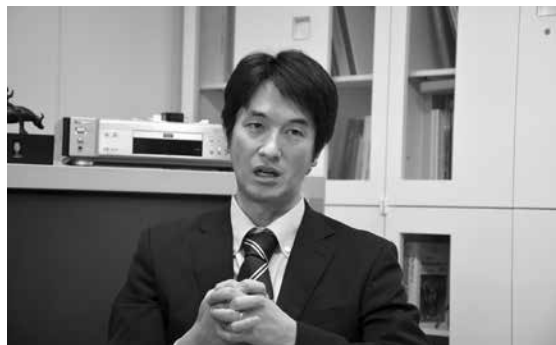


② ルールスクールの具体的な内容をお話してください。

林 レベル2を例に挙げますと、規則の各規定の説明、解釈から重要裁定の解説、レフェリー技術などの講義に実際に競技で起きた事例のVTRを見ながらレフェリー対応の考察、さらにはコースキットを使用したのロールプレーを実施しています。そして最後に筆記テストが行われます。

③ コースキットとは？

林 人工芝などでつくった模擬的なコースです。パッティンググリーンからバンカー、ウォーターハザードなどさまざまな状況に対応できるような形になっています。



市村 バンカーには模擬の砂が入っています。本来はコースを使用してできればいいのですが天候の問題などもありますので、室内でできるようにコースキットを準備したのです。

④ ルールスクールの開催実績はいかがですか？

林 2013年5月に国内で初めてのルールスクールを開催して以来、約40会場で開催し、約1400名の方が参加しています。受講者のみなさんには非常に好評で、また受講したい、あるいはほかの人にも受講してもらいたいという声を数多くいただいています。

大場 レベル1に関しては本当に入門編なので、これからゴルフを始めようという方や、もう一度ルールの基本から勉強したいという方にもぜひ受講していただきたいと思っています。



⑤ レフェリーに話を戻したいと思います。現在、日本オープンなどでレフェリーをできる方はどれくらいいるのですか？

林 ルールスクールやテストは資格を付与するという性質のものではないので明確な人数を申し上げることはできません。たとえば日本オープンですと約20人のレフェリーが必要になります。日本オープンでレフェリーをできる基準をクリアしている方は何とかその数を満たせる程度で、十分な人数がいるとは言えないですね。

⑥ その基準はR&Aが定めているのですか？

市村 それぞれの国で事情が異なりますから、各国の協会に任されています。JGAのオープン競技では一定の基準を設けていますが、もし日本で統一したレフェリー資格を作るのであれば、JGAだけでなく、日本プロゴルフ協会、日本女子プロゴルフ協会、日本ゴルフツアー機構なども連携しながら模索していく必要があると思います。



大場 レフェリーを選ぶための基準はテストの点数だけでなく、レフェリーとしての資質が重要になってくるということもありますね。

①ルールスクール、室内講義の様子。
②バンカーのコースキットを使用した講義の様子。
③パッティンググリーンのコースキット。
④実際のコースを使用した講義の様子。

⑦ レフェリーとしての資質ですか？

林 非常に大切な部分です。レフェリーは単に規則を知っているというだけでは務まりません。大切なのは選手と良いコミュニケーションをとるということです。規則に関する知識を正しく現場で適用するには選手に正しく伝え、理解してもらうことが絶対に必要です。「オレがレフェリーだ」というように大上段に構えていては混乱を招くだけです。裁定するのは人ではなく、規則なのです。いくら規則に精通していても、そこをはき違えてはいけません。テストのスコアがすべてではなく、テストでスコアをとることは最低限のことであり、そこからのプラスアルファが実は重要なのです。

市村 国によっては机上のテスト以外に独自に現場力を試すテストを実施しているところもありますね。

大場 すべては選手のためだと思います。規則を熟知していない方やコミュニケーションがうまく取れない方がレフェリーをしていては選手がかわいそうです。

⑧ レフェリー制度の将来像はどのように描いていますか？

林 ゴルフはよく「レフェリーのいないスポーツ」だと言われますが、正しくは「ほとんどの場合レフェリーの立ち会いなしに行われる」ということです。実際、規則書には「レフェリー」という定義が明確に規定されています。プライベートのラウンドではレフェリーがいないのが当たり前で、競技でもすべての選手のすべてのプレーを見ているわけではありません。しかし、レフェリーはルーリングの裁定など規則上重要な役割を占めているということをまず理解していただきたいと思います。将来は日本オープンなどの大きなトーナメントだけでなく、地区やクラブ単位ですべての競技でレフェリー制度が浸透することが理想です。そのためにはより多くの方に正しい規則を勉強していただきたい。日本における規則の知識は「言い伝え」によるものが多いと感じています。「先輩がこう教えてくれたから」あるいは「うちのクラブではこう言われている」というようなものです。正しく伝えられていけばいいのですが、残念ながら間違った「言い伝え」が少なくないのが現状です。正しく勉強することで正しく規則を知り、多くの優秀なレフェリーが育っていくことを期待しています。

⑨ 本日はありがとうございました。